

## JOHN KNOX HOUSE TOUR

1

ジョン・ノックスとジェームズ・モズマンの時代、現在のレセプションがある場所は商業の中心でした。

正面の窓の位置には宝石商が、ギャラリーの本棚のある場所には刃物商、毛皮商、仕立て屋などが5~6軒軒を連れ、それぞれの商品を陳列していました。

ギャラリー内の柱で仕切られた各スペースには、日中の陳列用に「ラッケンブース」と呼ばれる鍵付きのストールがあり、それぞれ商人たちは地下に物置場と作業場を持っていました。

ギャラリーの方へ進み、もともと外壁のあった場所に触れてみてください。そして、地下室へ続く階段を見て、またレセプションの方へと戻ってください。

16世紀には現在ストーリーテリング・センターの新館への通路を通じて、隣の店と行き来することが出来ました。建物の外に出ると、正面のドアのところにポイント2があります。

2

ジョン・ノックスの家は、レプリカか偽造物ではないかと言われてきたほど、絵に描いたような美しい建物です。

実際、エディンバラで唯一完全な形で残っている中世の館で、木造のギャラリーが覆いかぶさるように突き出しているのが特徴です。

この家にはたくさんの入り口があり、それらの入り口は1階の店や家の正面部、当時は別々だった家の後部にも通じていました。

特に建物の正面には、由緒正しい古代ギリシャのドリス式の円柱と花の装飾があり、荘厳な雰囲気漂わせています。

入り口のドアの上にある紋章は、スチュワート朝の王室専属の金細工職人で、スコットランドの王家の冠なども作っていたモズマン家によって作られたものです。

イニシャルは縦にも横にも読むことができます。

JMとMAはジェームズ・モズマンとこの家の所有者で相続人であったマリオタ・アレスの結婚を意味しています。

1559年の彼らの結婚の後、このファサードを含めた家の大改築がなされることになりました。

日時計には、シナイ山で太陽に象徴される神の光を受けているモーゼが示されています。

『新約聖書』で、イエスがモーゼの律法で何が最も重要かについて尋ねられた時、イエスは「何よりも神を愛しなさい。そして、自分自身を愛するがごとく、隣人を愛しなさい」、とされました。ファサードに刻まれているものはそのスコットランド語版です。

ジェームズ・モズマンは伝統派のカトリック教徒でした。

彼は摂政女王マリー・ド・ギーズとその娘のスコットランド女王メアリーに献身しました。

しかし、家は2人のカトリック教徒である女王の大敵である、ジョン・ノックスとも関わりを持つようになるのです。

ノックスがこの家に住んでいたため、家は何度も破壊から逃れることができたと言われています。ノックスがここで亡くなった可能性はあるものの、この家は彼の牧師館でもエディンバラの家でもありませんでした。

道路側の方へ進むと、家の上部へと繋がっている正面側の階段が見えるでしょう。

その階段を上り、ネザーボウ・タワーの傍にあるビュー・ポイントまで行くと、ポイント3があります。

3

ネザーボウ・タワーのあるこの場所は、ロイヤル・マイルの中間地点となっています。

下り坂の方面には、ホリールードと遠方にアバレディー湾が、上り坂の方面にはセント・ジャイルズ大聖堂とエディンバラ城が見えます。

ジョン・ノックスは、1560年のスコットランドの改革後初のセント・ジャイルズ教会のプロテスタントの牧師でした。この中間地点は、「ネザーボウ」または、「ロウワー・ベント」と呼ばれています。

ネザーボウ・ポートが壊される1764年までは、エディンバラとキャノンゲートは別々の自治都市でした。

エディンバラの主要な玄関口であったこの城門は、最初にジョン・ノックスの家のそばに建てられ、フロッデンの戦いの後、1513年に交差点の反対側へ移されました。城門の外側は「ワールズ・エンド」、つまり、「この世の果て」と呼ばれていました。

現在のネザーボウ・タワーには、かつて町の玄関口であった頃の2つの大きな特徴があります。

1つは、1606年と彫られたパネルで、これはジェームズ6世(イングランド王1世)とアン女王が、ガイ・フォークスの『火薬陰謀事件』の爆殺から逃れたことを記念したものです。「平和創造者に祝福あれ、国王陛下万歳」という、ジェームズのモットーが掲げられています。

もう1つは、タワーの上部にあるシティ・ベルで、「エディンバラの議会と人々」が1621年にオランダから取り寄せたものです。「神に栄光あれ」と「我に触って無事に帰るものはいない」、というモットーが掲げられています。このベルは、通りをさらに下った場所から見ることが出来ます。

1603年にスコットランド王ジェームズがイングランドの国王としても即位するためにロンドンへ移った後、ネザーボウの城門は再建され、ジェームズを記念して精巧な装飾が施されました。

エディンバラの人々は、ジェームズに北にもう一つの首都があることを思い出させたかったのです。

建物の中へ再び戻ってください。

レセプションの左側のドアを通り抜けたところにミュージアムの紹介があります。

ドアの天井が低くなっていますので、頭上には十分注意して入ってください。

らせん階段を上ってポイント4に向かう前に、座席が設けてあるエリアで音声に耳を傾けてみましょう。

#### 4

このらせん階段は家の正面側だけでなく、家の後部の上の階へも続いています。

モズマン家はこの家を住まいとしてだけでなく、商用や作業場としても使っていました。

当時の金細工職人は宝石商のほか、質屋と貸金業者を兼ねていました。

見習いや身内の者は、家の上部に住居を与えられていました。

家を切り盛りすることは、モズマンの最初妻であったマリオタ・アレスにとって大変骨の折れる仕事でした。

エディンバラ城が包囲されていた頃のジョン・ノックスの時代は、使者や訪問客、使用人、ノックスの秘書のリチャード・バナタインの家の出入りが絶えず、忙しかったのです。

最後の病床においてさえ、ノックスの発言や意見はエディンバラの人々にとって大きな影響力を持っていました。

ジョン・ノックスはこの時まで2番目の妻マーガレットと結婚し、最初の結婚でもうけた2人の息子に加え、3人の娘がいました。

階段の方へ戻ると、書庫の左側にポイント5があります。ドアが低くなっているので、頭上には十分注意して下さい。

#### 5

宗教改革はヨーロッパで始まり、マルティン・ルター、カルヴァン、ジョン・ノックスのようなプロテスタント教徒だけでなく、カトリック改革派として残ったエラスムスまで巻き込みました。

学者たちが過去の言語や文化を再発見し、歴史的な見解を取り入れていったことで、宗教改革は起こりました。発展しつつある町での教育の普及と印刷技術の発明が、宗教と政治における議論を広範囲に知らしめることになったのです。

プロテスタント教徒は教養のあるエリートが使用していたラテン語よりも、むしろ母国語で誰もが聖書を読めるようになることを望んでいました。

ケース3には、スコットランドで印刷された最初の英語版の聖書、『バセンダイン聖書』が展示されています。

これは、1572年から1573年の間にネザーボウで印刷されたものです。

これらの議論の中に登場するヨーロッパの重要人物には、ノックスの教師でカトリックの哲学者であった、ジョン・メイヤーや詩人で歴史家であったジョージ・ブキャナンも含まれていました。

同じくケース3に展示されている彼の作品『スコットランド史』は、国民主権が与える統治者の影響と不当な君主の追放について議論したものです。

ジョン・ノックス自身はスコットランドにおける改革の歴史を書く予定でしたが、実際に書かれたものは客観的な歴史よりも彼の動機や行動について熱心に擁護された内容になっています。これはケース5に展示されています。

プロテスタントとローマ・カトリック間の大きな議論の1つとなったのは、キリスト教における聖餐式の役割についてでした。ジョン・ノックスとクロスラギュエル修道士長との議論は、ネザーボウで1563年に印刷されました。それは、ケース5の下部に展示されています。

暖炉の上に掛けられているウィリアム・ダイスによるヴィクトリア朝の絵は、1557年から1558年にスコットランドを密かに訪れたノックスが最初のプロテスタントの聖餐式を行った様子が描かれています。ノックスは最後の晩餐のイエスのようにも見えます。

## 6

1560年の宗教改革以前には、エディンバラはすでに裕福な町で拡大を続けていました。モズマン家は金細工の商売のおかげで裕福な暮らしをしていました。金細工職人は宝石商だけでなく、質屋と貸金業者を兼ねていたからです。

16世紀には、この部屋におそらく彫刻で飾られたパネルがあったと思われます。窓の下の作業台には金細工職人が使う道具が展示されています。モズマン家はメアリー・スチュアートのためにしばしば宝石を作っていました。さらにモズマン家は硬貨に使用される高価な金属と基礎となる金属の含有量を確認する、最高分析者でもありました。

モズマン家の財産の一部は、エディンバラの町で最も壮観な聖ジャイルズ教会に寄付されました。金細工職人たちは左側の壁龕にある聖エリギウスに捧げられたチャペルを鍛造職人たちと共有していました。チャペル内には精霊のパナーがかかっています。

あちらの壁にそのパナーのレプリカが見えるでしょう。チャペル内でのミサは亡くなった職人たちのためのものであり、その未亡人と孤児に慈善事業をするために集会が開かれていました。

暖炉の上にある20世紀の陶器はジェリコ・クジュンズィックによるもので、コインの複製はモズマン家が造幣局の管理者でと分析官であった間に作られたものです。コインはスチュワート君主の肖像画に特徴的なものです。暖炉自体は、17世紀前半のオランダ製のタイルの好個の一例と言えるでしょう。精巧な花瓶は、ロッテルダムのプロームタイル工場のロゴです。

セキュリティはその当時の大きな課題で、暖炉の右側のケースの中にある小さな金庫に宝石や金貨が保管されていました。

コインの鑄造には非常に高い技術が必要とされていました。モズマンの時代、造幣局はホリールード宮殿内にありました。右側にあるショー・ケースには1559年から1572年のスコットランドのコインが展示されています。通路を続けて進むと、ポイント7があります。

## 7

追放されたメアリー女王の支持者と彼女の幼い息子ジェームズの支持者との間に勃発した内戦中に、モズマンの生涯と繁栄は、悲劇的な結末を迎えました。

王家の宝石を質に入れて武器を手に入れたモズマンは、3年間エディンバラ城の防衛に参加し、また、彼の知識を使ってメアリーの頭を運ぶために生産済みのコインを鑄造しました。これらはどちらも極刑に値する罪でした。1573年にエディンバラ城が陥落した時、モズマンは防衛者の中で処刑を宣告された3人のうちの1人でした。

ジェームズ・モズマンは、台車でこの通りを後ろ向きに引きずられ、聖ジャイルズ大聖堂の側のメルカト・クロスで絞首刑となりました。

犯罪や処罰は16世紀のエディンバラの残酷な現実でした。最も軽い罪のなかには、うわさ話、中傷、暴言などに対する処罰があり、罪を犯した人の頭に「スコウルズ・ブライド」と呼ばれる鉄のくつわを被せ、口元を拘束するというものまでありました。

エディンバラ城は1569年に包囲され、1573年にエディンバラの町は長期間封鎖され、建物にも大きな被害が出ました。

ギャラリーに展示されている図面は、ホリンシェットの『年代記』に再現されたもので、おそらく目撃者情報によるものでしょう。

モズマンの部屋にいったん戻り、左側にある階段を上ってください。右手の最初の部屋にポイント8が見えるでしょう。

## 8

1559年にジョン・ノックスは亡命先のヨーロッパからスコットランドに帰還しました。それは、カトリック派とマリー・ド・ギーズのフランスの規則に対抗する宗教改革運動に参加するためでした。

目的はマリーを廃して、スコットランド法からミサにおけるローマ法王の管轄権を撤廃することでした。

この目的は達成されましたが、ノックスはそれ以上のものを望んでいました。それは神聖な社会を確立し、教会の財産で各教区に学校と社会保障制度を確立する、ということでした。ノックスはこの件では失望を感じていました。というのも、貴族たちは教会の土地や財産を自分たちのものにしたいと思っており、スコットランド女王メアリーも母親のローマ・カトリックの支持を続けたからです。

しかし、ノックスは後にスコットランドの教育、平等、勤勉の象徴として評価されることとなります。ステンドグラス

に描かれているノックスの肖像は、ヴィクトリア朝時代のアーティストで詩人であったジェームズ・バラントインによるものです。

暖炉の上のパネルは、聖書のロトとその娘たちの物語で、ソドムとゴモラの町が背後で燃えている様子が描かれています。

宗教改革がスコットランドの視覚芸術を禁止したと時々間違っ言われることがあります。宗教美術は確かに教会からは除外されましたが、室内装飾や印刷物の中では成功しました。

ベンチに腰掛け、ベンチのスピーカーから流れてくる1561年の『スコットランドの信仰告白』からの抜粋の文章に耳を傾けてみて下さい。それから、来た道を戻り、階段の一番上まで上ると右手に踊り場があります。入り口が低くなっているので、注意してください。

9

らせん階段の一番上のところで、家の正面と後ろ側の床の段差がさらに大きくなっていることに気がつくことでしょう。これは、もともと別々の建物であったことを示しています。

ジェームズ・モズマンの死後、彼の後妻であったジャネット・キングが「結婚持参金」、というより正確には「年金」として家を修復させます。

区分した部屋をそれぞれ1つの家として賃貸することは、当時はごく一般的なことでした。これは専用の正面玄関とドア・ノッカーの付いたまったく別の家のロビーとなっています。

17世紀には床の段差にもかかわらず、区分されたそれぞれの家に人が住み、前側の家、後ろの家という具合になっていました。

目の前にあるのは3階部分の主要な部屋で、17世紀よりも後の時代のものになります。モズマン家ほどの裕福な階級の人ではなかったにしろ、地主や商人の階級の人々によって居住され続けていました。

建物の右側にあるギャラリーに向かって進み、ポイント10の説明に耳を傾けてみましょう。

10

ジョン・ノックスが中核となったプロテスタント革命にもかかわらず、女王メアリーは王座に就くために1561年にスコットランドに帰還しました。

多くの人々は古き良き時代が戻り、伝統的なカトリック信仰が回復すると思っていましたが、実際のところ、メアリーの帰還はノックスと女王の間だけでなく、激しい宗教的また政治的な対立への動機づけとなったのです。

メアリーの帰還を喜んだモズマン家は、主に彼らが使用していたこの部屋を装飾し直しました。

モズマン家は居住人が続けて居住したことにより、精巧な装飾のパターンを確立しました。

暖炉のタイルは、19世紀に破壊された旧市街にあった家のものです。

現在の天井はおそらく1600年以降のもので、多くのイメージと鮮やかな色が使用されています。

十二宮と翼のある妖精、悪魔が描かれています。

これらの模様は画家の見本の中から依頼主が選択できるものでした。依頼主の趣味は、広範囲で、元気一杯且つ、冗談半分に卑猥だったことがこの天井から伺えます。

部屋の左側にあるパネルには、カインとアベルの聖書の物語が描かれています。

また、フリーメーソンのシンボルの付いたジャコバイト時代の「キスト」と呼ばれる木製の大きなチェストの複製にも注意してみてください。

これは、魔女狩り、宗教的な迫害と新しい哲学の時代と同じ雰囲気醸し出しています。

キストの上にあるパネルのボタンを押すと、メアリー・スチュアートとジョン・ノックスの会話を聞くことができます。

ポイント11は伝統的にはジョン・ノックスの書斎であったと信じられている小さなギャラリー内にあり、ポイント10の先にあります。

11

ノックスとスコットランド女王メアリーは、大きな違いこそあるものの、敬虔なキリスト教徒でした。

悲劇的にも当時の政治が原因で2人は対立することになり、多くの苦しみや死に直面することになってしまったのです。

暖炉の上の王家のライオンはメアリーのスコットランド帰還の年、1561年10月31日に彫られたものです。

ジョン・ノックスとメアリー女王は、どちらも感動的な最後の祈りを残していきました。

「私の唯一の希望と命である、イエス・キリストの元へ参るために、困難と悲しみに満ちた私の精神を永遠の神の手に託して人生を終えましょう。私がこの哀れな人生から解放されることを神も喜ばれると信じます。ああ、神よ、汝の手に私の魂を捧げます。」

「ジョン・ノックスの家」のツアーをお楽しみ頂けましたでしょうか？レセプションへと戻り、ハンドセットを返却してから、ストーリーテリング・センターのカフェやエキシビションへお立ち寄りください。